

済的には colonial type であったこと、第二は、人口増加率が日本よりはるかに高かったこと、しかも第三に気候的要因が経済人としての活動を阻害しているのではないかとのこと。いずれも示唆にとむ見解だと思われる。

わたくしは、本書の価値はもちろんだが、こうしたシンポジウムが開催され、その成果が出版されたそのことを高く評価したい。(本岡 武)

Maung Maung: A Trial in Burma, The Assassination of Aung San, Martinus Nijhoff, The Hague, 1962. vi+117p.

ビルマで7月19日は Day of Martyrs, 1947年のこの日に暗殺されたオン・サンを国をあげて追悼する。1961年のこの日、たまたまシャン州の首都タウンジーに滞在していたわたくしは、グラウンドに市民・学生生徒が集まって静かにオン・サンをしのぶ大集会に出席し、強い感銘をうけたことを思いだす。政府のオフィスは、ときの大統領や首相の写真がかかかなくても、必ず軍装のオン・サンの肖像がかかっている。まさに、オン・サンは建国の父として永遠に追憶的となっている。

このように神格化されているのは、かれがビルマ建国にはたした役割による。しかし同時に、齢わずかに32才、ビルマ独立に先だつ半年前、ラングーン総督府の一室で、かれの新閣僚たるべき同志と会議中、かつて首相の経験のあるウ・ソーの一味によって、白昼殺されたという、ビルマ近代史上最大の悲劇にもよるであろう。

現在ビルマのすぐれた法律家であり、また Burma's Constitution, Burma in the Family of Nations などによって、ビルマ問題の著作家として世界的に知られているモン・モン博士が、ウ・ソー一味の裁判記録をもととして、オン・サン暗殺事件の経過を明らかにした。この事件は、ビルマの政治過程を理解するひとつの鍵であるだけに、いまここに客観的に事件の経過を裁判記録にもとづいて分析された本書のもつ意味は大きいと思われる。

本書は裁判記録を第3章以下にあて、第1章はオン・サン、第2章はウ・ソーの略歴にあてている。オン・サンのことはよく知られているが、ウ・ソーはあまり

知られていない。戦争前に首相となり、勃発直前ロンドンに独立交渉にわたり、勃発とともにイギリスによってアフリカで抑留、終戦後ビルマに帰り、ついに死刑に処せられたウ・ソーの数奇な運命を見ても、また、なぜかれがオン・サンを暗殺することによって政権がとれるとイージーに考えたかということを見ても、つくづくビルマの政治構造だけでなく、ビルマ人そのものの personality や behavior を考えさせられる。政治問題には素人であるわたくしにとって、本書は推理小説のおよびもつかない迫力をもっている。まさに事実は小説より奇なりだ。

わたくしは、著者モン・モン博士をエール大学にたずねたことがあるが、博士はちょうどこのとき visiting lecturer としてのニュー・ヘブンの研究生活を利用して本書を執筆されていた。博士のラングーンにおける生活を思うとき、交換教授としての生活で本書を書きあげたことを喜びたいと思う。(本岡 武)

Atlas of South-East Asia, Djambatan, Amsterdam, 1964. 84p.

東南アジアのまとまった地図帖は、東南アジア研究者の間に渴望されていた。東南アジア全域についてはもちろんのこと、各国別の地図帖も初等・中等教育程度以外のものは全然刊行されていない。唯一の例外は、戦争直前インドネシアについてまとめられた *Atlas van Tropisch Nederland*, Topographischen Dienst in Nederlandisch-Indië, Batavia, 1938 だけである。(この熱帯蘭領地図帖は、かなり古くなっているが、今日においても最高水準をゆくものであることを付記しておきたい。)

このたび、*Atlas of the Arab World and the Middle East* を刊行したアムステルダムのジャムバタン社より、これと同じ種類の地図帖が東南アジアについて刊行されたことは、まことにありがたい。

本地図帖のサイズは 25×35cm。表紙と裏表紙の見開きに、東南アジアの歴史地図が8図に収められている。主要なのは5色版で60ページにわたっての東南アジア全域・フィリピン・インドネシア・シンガポール・マラヤ・タイおよびインドシナ3国のそれぞれについての、一般図としての地形図のほか、特殊図としての気候・植生・地質・土壌・政治・人口・民族・土地